

ハウレンソウ ベと病 情報

今年は例年になく、ハウレンソウベと病が多発しており、2月13日と4月中旬の調査では、下表のような発生状況となっています。

既に2月16日付けの「防除所ニュース第1号」で注意を呼びかけたところですが、今後も引き続き発生状況等に注意してください。

1、ベと病の発生状況

場所	2月13日調査		4月16日、19日調査		
	調査ほ場数	発生確認ほ場数	調査ほ場数	発生確認ほ場数	発生株率
京都市	露地	11	4	1	60%
	ハウス	1	0	-	-
山城	露地	3	10	4	32%、20%、8%、8%
	ハウス	3	1	-	-
南丹	ハウス	2	2	0	0
中丹	ハウス	2	0	-	-
府内		22	7	16	5

2、ベと病の被害

下葉及び子葉の表面に黄白色で輪かくのはっきりしない小さな斑点ができ、それがしだいに拡大し、不定形の淡黄色の病斑となります。さらに被害がすすむと病斑が融合して葉の大部分が淡い黄色となり、被害葉は枯死します。

株の中では外葉に発生が多く、しだいに上位葉に広がり、株全体に及びます。

病斑の裏側には、特徴的なネズミ色、灰紫色の粉状のカビ（分生子）を生じます。

3、ベと病の生態

ベと病の病原菌は藻菌類に属するカビの一種で、現在は7つの系統（レース）が確認されています。現在、京都府で発生している「ベと病」についてはレースが特定されていません。

平均気温が8～18℃、とくに10℃前後で、曇天や降雨が続くと多発します。また、早播きや厚播き、施肥量の多い時などは葉が繁茂し軟弱に育つので、被害が大きくなります。

病原菌は主として被害株についた菌糸の形で越冬し、気温の上昇とともに菌糸上に分生子を形成し空気伝染します。また、病葉内部には耐久器官の卵胞子が形成され、これが土中や種子に存在し、これも伝染源となります。

4、防除上の注意点

発病株は伝染源となるので、早期に見つけ、除去処分することが大切です。収穫後は、残さをほ場周辺には放置せず、集めて土中に埋め込むか袋に入れて処分してください。

多湿条件は発生を助長するので、温度、かん水、ハウスの換気などに留意し軟弱にならないように栽培管理してください。

トンネル栽培やベタ掛け栽培している場合は、発生に気付くのが遅れることがあるので、こまめに見て回り、初発生を見逃さないようにしてください。

生育初期等で収穫までの日数に余裕がある場合は、農薬等で防除を行ってください。

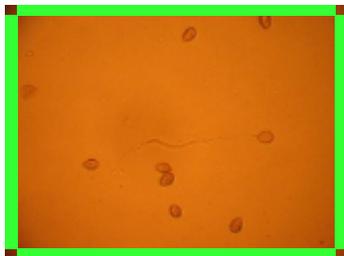
農薬による防除は、最新の情報を確認の上（下表参照）、多発してからでは効果が劣るので、発生初期に展着剤を添加し葉裏に十分かかるよう散布しましょう。また、散布する場合は、飛散（ドリフト）防止に十分に気をつけましょう。



べと病による被害（葉表）



べと病による被害（葉裏）



分生子



分生子柄

ホウレンソウべと病に登録のある薬剤

農薬名(商品名)	希釈倍数等	使用時期	使用回数
リドミル粒剤2	9kg/10a	は種時(全面土壌混和)	1回
ピスダイセン水和剤	500倍	本葉2葉期まで。但し、収穫45日前まで	2回以内
ヨネポン水和剤	500倍	収穫14日前まで	4回以内
サンドファンC水和剤	1000倍	収穫7日前まで	3回以内
ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	3回以内
アリエッティ水和剤	1500倍	収穫前日まで	2回以内
コサイドボルドー	1000倍	-	

平成19年4月23日現在